

紙芝居「わたしはテイコです」について

田村 和子

ずいぶん昔の話になりますが、1950年代の札幌には紙芝居の上演を仕事とする人が結構たくさんいました。主に中年過ぎのおじさんだっと思いますが、荷台に木枠をくりつけた自転車を広場や通りの一角に止め、拍子木をたたいて子どもたちを呼び集めました。拍子木の音を耳にするとわたしたち子どもは家族に小銭をもらい、一目散に自転車の前に駆けつけたものです。紙芝居のおじさんはお金を受け取り、棒付き飴を渡してくれました。そして、いよいよ紙芝居のはじまり、はじまり。舞台と呼ばれる木枠の中で繰り広げられる物語の世界にわたしたちは飴でべとべとする手を気にしながら引き入れられてゆきました。

ワルシャワ市内にあるパヴィヤク監獄博物館では毎年9月末から10月初めにかけての数日間を「パヴィヤクを記憶する日」として様々な催しが行われています。博物館の歴史に関わる講演会、映画の上映会、コンサートなどです。その期間にはワルシャワ市内外の小中学生、高校生が見学を訪れ、展示物を見たり、催し物に参加したりしています。

紙芝居「わたしはテイコです」(絵 児玉智江、文 田村和子)はそんな見学を訪れた小学5年生のピョートル少年が博物館内の暗い廊下に迷い込み、そこでかつての囚人カミラ・ジュコフスカが作った日本人形に声をかけられ、戦争の悲話を知るというストーリーです。わたしは2009年に刊行した拙著『ワルシャワの日本人形』には描ききれなかった部分をこの紙芝居に込めました。

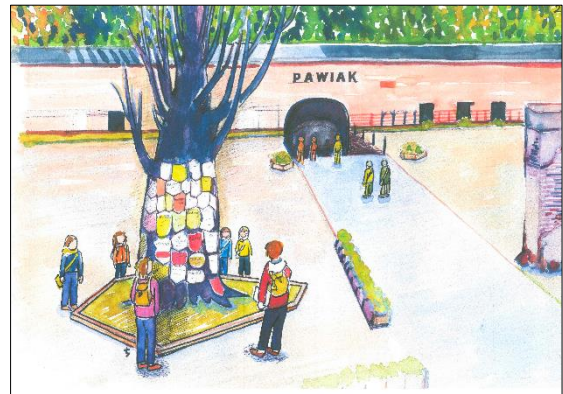
今ポーランドでは紙芝居人気が高まっています。紙芝居はポーランド語では *teatr papierowy*、あるいは *teatr obrazkowy*、*teatr narracji* と言うのだそうです。オシフィエンチム子ども図書館には、紙芝居の魅力、教育的効果を熱心に広めているメンバーがいて、彼女の話では、上演後にもう一度物語の世界に浸ろうと、舞台である木枠の中に入ろうとする子までいるのだそうです！（たむら かずこ）

(参考図書)

- 松永伍一『蝶は還らず: プリマ・ドンナ喜波貞子を追って』
毎日新聞社、1990
兵藤長雄『善意の架け橋: ポーランド魂とやまと心』文藝春秋、1998
田村和子『ワルシャワの日本人形: 戦争を記憶し、伝える』岩波ジュニア新書、2009



ほくはポーランドの首都ワルシャワ市に住む小学校5年生です。名前はピョートルと言います。



9月のある日、学校の社会科見学でほくは市内にあるパヴィヤク監獄博物館に行きました。博物館の前の広場には一本の不思議なニレの木があって、木の幹にはここで死んだ人の名前が書かれたプレートが何枚もぶら下がっています。



「わたしはテイコです。わたしを作ったのはここに投獄されていたカミラ・ジュコフスカさんです。監獄の中でカミラさんは戦争前に見たオペラのことを思い出し、日本人形を作ることにしたのです。」



「カミラさんは『蝶々夫人』のプリマ・ドンナだったキワ・テイコの大ファンでした。テイコは日本で生まれ育ったけれど、おじいさんとお父さんはオランダ人で、オペラ歌手になるために日本からイタリアに渡って勉強し、ポルトガルでデビューし、戦争が始まる前にはポーランドにも何回か来て公演しています。」



「刑務所に入れられてから2年後の5月のある夜、カミラさんはおよそ 220 人の囚人たちといっしょにワルシャワ郊外の森の中に連れ出され、そこで銃殺されました。戦争が終わってすぐの頃、ポーランド赤十字が森の中から死体を掘り出しました。身に着けていた特徴的な花柄のブラウスから、カミラさんの遺体はすぐに見つかりました。」

《新会員のひと言》

灰谷慶三先輩の思い出など

若松 雅迪

今年6月の「午後のポエジア」でポーランドの曲「今日は帰れない」を歌う機会をいただいた軽度認知症・脳梗塞の元氣な老人です。私は国文科卒業ですが、協会の重鎮(第三代会長)灰谷慶三先輩のゴゴリに触れた最終講義を拝聴してから既に十数年を超えます。「3年8組灰谷慶三」と名乗って札幌西高校生徒大会で演説された私たちの高校時代から 61 年が経過して、文学部学生時代の頃の激動まで夢のように想起されます。大学は異なりますが、同時代でやや後輩の加藤登紀子さんがフランスのシャンソン歌手の持ち歌として最初に耳にされた「今日は帰れない」が、実はポーランドのバルチザンの歌だったことを知ったのはつい昨日のようです。



灰谷元北大文学部長、荒木俊夫同法学部長ほか、今ご存命なら米寿前後の皆さんは、60 年安保闘争の渦中で唐牛健太郎全学連委員長(当時北大)や岸政権に虐殺された樺美智子さんや私たちを先導した先輩です。加藤登紀子さんとその夫君、藤本敏夫全学連委員長はそれに続く世代でした。

「今日は帰れない」(スタニスワフ・マギエルスキ作詞・作曲、加藤登紀子訳詞とギターと歌)が NHK BS

の番組で放送された頃、確かに冷戦は過ぎ去りナチスやソ連の圧政も過去の歴史となったようでした。しかし今も世界中で、当時のポーランド市民と同じ苦境にある人々に目を向けずにはられません。普通の市民が身を隠して逃げ惑わなければならぬ時代は、今も同じです。

高校で灰谷さんと同じ文芸部だった亡妻が 1947 年、義母義弟たちと命からがら旧満州から引き揚げてきた、その日中戦争での南京大虐殺も、日米戦争での沖縄戦や東京大空襲も、広島・長崎の原爆も、大多数の庶民が殺された戦争です。ヨーロッパの対独戦争、対ソ連抵抗運動も、現代のアメリカ対中南米、アラブ、アフリカも、イスラエル対イスラムも、アフガン、パキスタンなども、他のいくつもの国での内乱や侵略戦争も同じ繰り返しです。

1999年3月から4月の40日間ベルリン市マルデブルクの次男のアパートに亡妻と泊まり、さらに鉄路で国境の街フランクフルト・オーデルを訪れたのはポーランドが EU に加わる前日でした。検問所を通る最後の旅人だった私たちに、東の間ですが対岸を散歩中のポーランドのお二人が温かく接して下さったのを今も忘れません。

こちらは英語カタコト、あちらはポーランド語とドイツ語と、言葉も通じないポーランド人父娘とわれわれ日本老夫婦。やむなく数字を紙に書いて自分の年齢だけを伝えて、数分の中に NHK の相撲中継の話やお二人が川を挟み国境を隔ててその日まで苦勞されたことまで知りました。

東欧のオーデル河とナイセ河の国境のことはフランス側からドイツの侵略を批判した「最後の授業」

(アルフォンス・ドーデ短編集『月曜物語』(1873)所収、副題「アルザスの少年の話」)の邦訳で小学生のころ接しましたが、ナチスやスターリンの圧政にどれ程の苦労を経験されたことでしょう。

ベルリンでは、次男の住居のそばの壁記念館やユダヤ記念館、アウシュビッツより巨大なオラニェンブルク強制収容所、チェックポイント・チャーリーなどを訪ね、ベルリン市民、特に小中学生、先生、ガイドさんたちや次男のバレエ仲間等の幾人かと話して、一見に優るとも劣らないお話で大戦や冷戦当時のさまざまを知りました。大戦で加害者にも被害者にもなったドイツ・日本と違い、常に被害者だったポーランドはじめ東欧の人々をもっと知らなければと痛感しました。

帰国後 10 年ほど経って、妻を癌で、灰谷さんを脳梗塞で喪い、あまりにも多くの「戦友」を送るはめになりました。私たちが「戦友」と呼ぶのは、せいぜい子育て戦争や日常の対占領軍抵抗運動や反戦護憲の闘いに過ぎませんが、世界中で戦争そのものが続いています。そして安倍政権のもと、日本も戦争にまっしぐらの昨今、困ったものです。

(わかまつ まさみち)

ほんのひと言

稲川 和幸

手元にある『ポーランド革命』(岡田春夫・工藤幸雄・佐久間邦夫著、亜紀書房、1981)を開くと序章にもあるように、ポーランド人は親日的なのですね。直航便も出来たことですし、クラカウ等を訪れてみたいものです。



『ポーランドを知るための 60 章』(渡辺克義編、明石書店、2001)を早速購入し、コツコツ読み始めました。「シュラフタ」という言葉に接して、懐かしさがこみ上げてきました。「国際政治」を受講した際、〈ポーランド外交史〉を聴く機会があり、「シュラフタ」という語に最初に出会ったのはこの時でした。

あと3年ちょっとで 70 の大台に達する日々、孫姫2人とたわむれることが多くなりました。高校の教壇を降りて早5年が経過しています。週に1~2度、はるか遠く蘭島ミニミニ農園へ妻と2人、車で通い、小農作業で発汗しています。今の季節、海から吹きつけるぬくとい風はナマラ心地良いものです。

初夏恒例の北大祭。留学生の活躍するポーランドテントへ2度も足を運び、「ラツヒ」(リンゴパンケーキ)

と「キェウバサ」(ソーセージ)が特に気に入りました。今回は孫姫も加えてぜひ参加したいものです。

この2月の例会、新井藤子氏講演会「ピウスツキと日本、北海道、先住民族」では、実り豊かな研究報告を拝聴できました。新しい視点から切り込んで来る迫力あふれる発表には大いに啓発されました。

本物の会員になるためには、本場産の「ズブロッカ」(貴重なバイソングラスを漬け込んだウオッカ)は欠かせないとか(??)。何店か巡り歩いて、やっと入手した一本。ショパンのファンでもある妻と共に、会の発展を祈って、まずは乾杯と致します。

末筆になりましたが、血液型はB型、生まれは小樽市、星座は乙女座です。皆様どうぞよろしくお願い致します。(いながわ かずゆき)

入会のご挨拶

熊谷 敬子

お付きあい重ねる毎に敬愛増す長屋様からのご縁によりまして、昨年5月午後のポエジアに参加のお席を頂き、引き続き今年もお呼び頂いた感謝と親愛を表すには入会という事が何よりかと、申し込ませていただきました。どうぞよろしくお願いいいたします。



昨今カルチャー教室やイベントでも盛んになってまいりました朗読ですが、自分では「語り」と読んでおります。震災の翌 2012 年、忘れないための証を自分の振る舞いとして伝えようと、音楽と語りのライブ活動を開始。名前を「つむぎびと」と称して、音楽の旋律をことばと動きにのせて物語るステージを試みてまいりました。

主に優れた児童文学の秘められたエッセンスは大人こそ対象にしたいとの思いがあります。幼心の柔らかさと純粋な健気さを表した児童文学に大人が対面することは、混沌とした方向へ向かう危惧がある今、意味があるのではないだろうか、と。

技巧、修練共に甚だ未熟なところではありますし、付け焼き刃が剥がれぬかとハラハラしながらの語り人、未だ途上にはおりますが、さらに精進して語り継ぐべき物語を探求したいと思っております。

ポーランドの文化、芸術の深い憧憬へと知性も拓がるよう、皆様との更なる交流の機会もご期待申し上げます。入会のご挨拶といたします。

(くまがい けいこ)

発行
北海道ポーランド文化協会

〒060-0018
札幌市中央区北 18 条
西 15-3-19 安藤方
電話・FAX 011-556-8834
hokkaidopolandca@gmail.com

POLE

第 90 号 2017. 1. 25
北海道ポーランド文化協会 会誌

北海道ポーランド文化協会
東京事務所

〒107-0052
東京都港区赤坂 9-6-29-309
音響計画(株) 霜田気付
電話 03-6804-1058
FAX 03-6804-6058

第 30 回定例総会&お茶の会報告

2016 年 10 月 29 日(土)14 時 30 分から、北海道大学クラーク会館 3F 国際文化交流活動室において、第 30 回定例総会が開催されました。会員 17 人が出席し、塚本智宏さんの議長で、所定の議案はすべて承認されました。

つづいてお茶の会にはポーランド人 6 人を含めて 25 人が参加し、ケーキ・チーズ・お茶とポーランド人差し入れのワインで賑やかに歓談しました。

写真撮影のあと岩手県在住の作家・翻訳家の田村和子さんから贈られた紙芝居「わたしはテイコです」(絵 児玉智江)が熊谷敬子さんとラファウ・ジェプカさんの朗読で披露され、みんな棒付きキャンディをなめなめ童心に戻りました。

ついで世界伝統空手道連盟から「生涯大使」の称号を与えられた霜田千代磨さんのスライド付きの報告、最後に尾形芳秀さん撮影の、さっぽろ雪まつりに参加したポーランド雪像チームと、遠藤郁子さんが出演した東京例会のスライドショーと、和やかで温かい雰囲気の会になりました。(小林暁子)

「わたしはテイコ」を読んで

さあ、紙芝居がはじまるよ。
坊っちゃん、嬢ちゃん、集まって
待っている子にはアメをあげるよ

事務局の小林さんが、やるからには思いっきり楽しみましょうとばかり、ペコちゃんの棒付きアメの大袋を差し出して、始まる前に配りましょうと援護して下さいました。そんなこんなで怖いもの知らずの紙芝居の“オネエサン”が紳士淑女の皆様を前に無礼講の口上をのべての始まり、始まり……

物語は一枚毎に私の日本語のあとラファラさんがポーランド語で語ります。秒速よりさらに小刻みなポーランド語は唇、舌の最速の振動で、時々心情を吐露する表現などが豊かに伝わって来ました。

紙芝居のストーリーは前号で作者の田村さんによるご紹介もありましたので割愛しますが、手作りの温かな紙の風合いや、彩りのやさしい感性が悲劇をよりクローズアップするように伝わってきます。「忘れないでください」と叫ぶテイコ人形の言葉は、犠牲となったカミラさんや膨大な数の民族の声を代弁して強く心に響きました。

ポーランド語のシャワーを存分に浴びながらの紙芝居は滅多に経験出来るものではなく、内容面からも奥深い企画だったと思います。学生時代に強制収容所につまわるものをむさぼり読んだことが急に甦って、源泉に立ち返るよう自分を意識できた気がします。今後の協会の活動がまたどんな出会いと学びをもたらすか期待が膨らんでいます。

以上、熊谷敬子でした。



(左) M・ジェプカ、小笠原正明、R・ジェプカ、(中左) R・ジェプカ、J・ヴィシュコフスカ、R・コムダ、坂田朋優、安藤むつみのみなさん、(中右) 紙芝居「わたしはテイコです」の上演(朗読 ラファウ・ジェプカ、熊谷敬子)と(右) 展示